# 無私の人

鵜飼正敏
東京農工大学大学院工学研究院　〒184-8588 東京都小金井市中町 2-24-16

私は大谷先生の門下ではありません。先生との共同研究に携わった経験もありません。研究者、研究指導者、教育者としての大谷先生を偲ぶこの場には不似合いではあるかとは思いますが、原子衝突研究協会（現、原子衝突学会）という小規模の学会の運営活動を通して大谷先生という無私の人格に接し、その人格に私淑する者のひとりとして、一筆の駄文を献上したいと思います.

## 1. 大谷先生との出会い

1982 年の北大における日本物理学会第 37 回年会は、当時東工大 M2 であった私が学会というものに参加した最初の機会でした。10 月 2 日に原子分子分科会（現領域I）主催になる「低エネルギー多価イオン衝突」というシンポジウムが開催され、その中心的なトピックスとして「名大プラズマ研における NICE 実験」が組まれ、金子洋三郎（都立大）、大谷俊介（名大）、小林信夫（都立大）、俵博之（九大）、木村正弘（阪大）、奥野和彦（都立大）、鶴淵誠二（農工大）、岩井鶴二（阪大）という、今では錚々たる原子衝突物理学の先生方が、個別に講演をなさいました。セッションの趣旨説明に立たれた端然たる金子先生に続いて、足柄山の金太郎のような容姿風貌のオニイさんが登壇して野太いガラ声で開口一番、「自分がやったことは実験後のコンパの手配で、」というイントロをはじめ、熊ならぬ真空装置にまたがってフランジを締めているオニイさんの写真が投影されました。「働いているのは大谷さん一人じゃあないですか！」という野次が上がり、座長の渡部力先生（東大）が和やかに取り仕切っていらっしゃいました。親密な雰囲気で進められる最先端原子衝突研究のおはなしに魅了されていると、指導教官の籏野嘉彦先生（東工大）の特命を受けた先輩に呼び出され、後ろ髪をひかれながら中座してそのまますすき野に繰り出しました。したがって、私が大谷俊介という名前に初めて接したときに、ご当人と面識を得ることはできませんでした。

次に大谷先生にお目にかかったのは、1986 年、青山学院での春の物理学会においてであり、わずかながら会話をさせていただいた記憶があります。当時、上智大 D3 だった平山孝人さん（現、立教大教授）から「大谷さんが原子衝突若手の会の夏の学校の講師をやらせろ（引き受けても良い、だったか？）と言っている」と聞いていましたので、大谷先生に「夏の学校の講師をお引き受けいただけるとお聞きしました」と申し上げたところ、「そんな話は知らないよ。オレ、やだよ」という意外にシャイなご返答でした（その代わりにといっては恐縮ですが、この年の夏（実は秋）の学校では NICE 実験の総帥であった金子洋三郎先生と化学反応における非断熱遷移理論で高名な中村弘樹先生（分子研）の講義を賜りました。後年、金子先生から「私の最終講義の準備はこのときにやった。鵜飼さんのおかげだ」と総括いただきました.）。

その後、学会や各種のパーティなどでご一緒させていただくことが多数ありましたが、面識を得るという形にはなかなか発展しませんでした。

## 2. 大谷俊介という人物との出会い

1995 年に農工大に異動し、上司である鶴淵先生が担当する学会関連の仕事に私も関与させていただきました。当時の原子衝突分野の課題の第一は 1999 年に仙台での開催が予定されていた第 21 回原子衝突物理学国際会議(XXI-ICPEAC)の準備でした。これについては本文集に松澤通生先生（電通大）、鶴淵先生もお書きに

なられています。多い時には1000人近い参加者の国際会議には巨額の開催資金が必要です。IUPAP に認定されている数少ない権威ある国際会議であるにもかかわらず、いかなるわけか、日本学術会議主催に採択されませんでしたので、主催資金が得られず、当初、国内組織委員会、なかでも経理部会は大きな困難に直面していました。資金集めの才覚に乏しい経理部会の面々を叱咤激励して各種の資金申請書を分担させ、企業賛助を指令するなど資金活動を指導しつつ、ご自身は募金委員長の責めを一人で担うかのように、財界・財団・学会・文部省等を連日のように飛び回る孤軍奮闘により、ついに開催資金を手当てしてしまった大谷俊介先生を間近に拝しました。私など何処をどうやったのか皆目見当がつきません。しかも、それを数々の大型研究プロジェクトと並行して達成されているのです。

この話だけでは、大谷先生が単に遣手の研究者であるという印象しか抱かれないかもしれません。これと同時期に私がかかわった原子衝突研究協会の命運にかかわる事業について記したいと思います。それは若手奨励賞の設立でした。2015 年には第 16 回を迎えた年次事業であり、「原子衝突研究分野に錚々たる若手を受賞者として輩出してきた由緒ある賞（大野公一先生、東北大名誉教授、現選考委員長の言葉）」と言われるまでになりました。ご覧のとおり仙台 ICPEAC の翌年からスタートしています。当時の原子衝突研究協会の特別事業委員会担当幹事の大谷先生と ICPEAC 担当幹事であった市川行和先生（宇宙研）の発案になるもので、「優秀学位論文賞」と名付けられていました。趣旨を一言で総括すると、第 11 回 ICPEAC（1979 年、京都）開催を目指して設立後 20 余年を迎えた原子衝突協会が 2 度目の ICPEAC を開催した節目にあたり、次のステージへの発展を担う若手の発掘と活性化のために設立する若手奨励賞でした。ところが、総会で設立が了承され、実施を念頭にした運営方法が提案されると議論が膠着しました。学位論文対象でなく、学位取得後の研究歴をもつ 30 代半ばまでの若手研究者の業績を対象とするほうが原子衝突研究協会の規模や所属会員動向と選考方法（どのような選考委員会を持つか）などからは賞の設立趣旨に適合するのではないかという反対意見が鈴木功先生から提出され、それを機に島村勲（理研）、福田昭（電総研）、俵博之（核融合研）、井口道生（アルゴンヌ国立研）などの諸先生からの意見が提出され原子衝突協会の幹事会・委員会を二分する状態となりました。これらを調整して賞設立を実現するため、大谷、市川、鈴木の各先生、柴田裕実先生（東大）と私による若手賞検討 WG が作られ（第 2 回 WG の際には福田先生にもオブザーバーとし出席いただきました）、一番若年の私がその主査を仰せつかりました。これまで原子衝突協会内の一部での議論をオープンにして、会員注視の下での賞の設立に向かうように軌道修正する WG であると心得て、私は議論の内容をすべて公表するための書記役に徹しました。わずか 2 回行われただけのその時の議事録は、原子衝突サーキュラー（現在は原子衝突学会誌「しょうとつ」に移行）への公表原稿、幹事会や協会委員会への審議資料も含めて 1cm をこえる厚さになって私のファイルにあります。WG の結論としては大谷・市川案と鈴木案を併記して協会委員会に答申するという簡単なものであり、その後の議論を踏まえて、若手の業績を対象とする「若手奨励賞」が発足し、ICPEAC 直後の 1999 年秋に第 1 回の公募が行われました。大谷先生も市川先生もどのような趣旨で賞を設立するかにこだわり、優秀学位論文賞にはこだわりませんでした。私は賞という傍目にはお目出たい事業を設立するということが、形式論からも、現状分析からも、そしてその帰結である学術分野の将来に対しても、きわめて困難であるとする危機意識の上に立って行われていることだということを、このときのもっとも激烈な議論を記録し、また、諸先生方の顔や声を思い浮かべながら議事録を起こしていく作業を通じて学びました。特に学術分野の将来構想には若手の育成をこそ根幹とすべきものであることを協会の特別事業を担当する大谷先生から強く指摘されたと思います。理路整然と議論を進める市川先生に対して、大谷先生は信念によって語るという印象でしたが、後にも先にも大谷先生があれほど真顔になって「原子衝突の将来に対して痛烈な危機感を抱いている。だから若手のための賞

を作るのだ」と語られるのを聞いたことはありません。ICPEAC の開催資金をほぼ一人で手当てした大谷先生も、数々の大型研究プロジェクトを推進した大谷先生も、一人の遣手や才人の業績の蓄積のためではなく、ご自身が身を粉にして大きな花火を打ち上げて後進の興味を喚起しつつ、彼ら（私たち）のために道を拓く努力を重ねていらしたのだと思います。第3回の若手奨励賞は本文集の編集者である中村信行先生が受賞されています。

皆様のご記憶にある大谷先生は豪快で屈託なく、博学・多趣味でロマンティストのお人柄だと思いますが、時期をほぼ同じくして国際会議の資金繰りのテーブルを囲み、また若手賞の議論のテーブルの向こうとこちらで睨み合った私には、すこし違った印象があります。それは、現状を憂いつつも将来を信じ、そのために自分を忘れて働く人格の持ち主です。2014 年 2 月の大谷先生を偲ぶ会で金子洋三郎先生がひとこと「彼はよく働いた」と仰っていました。

私の知る原子衝突研究協会には大谷先生のいない年度の幹事会、協会委員会はありませんでした。改称発展した原子衝突学会では、若手奨励賞を継承するとともに、2014/5 年には国際会議発表奨励賞と年会優秀ポスター賞が現会長の高橋正彦先生（東北大）の主導のもと、若手の発掘と活性化を目的として設立されました。これらにも関与しながら、私には原子衝突学会は大谷俊介先生の貴重な遺品を受け継ぎ整理しつつ次の発展を模索しているように思えます。

以上、満腔の感謝とともに。